

ワークショップ実践家はその専門性をどのように認識しているか： インタビュー調査と質問紙調査による検討

How do Workshop Practitioners recognize their Expertise? : A Survey Research

森 玲奈

Reina MORI

東京大学大学院学際情報学府

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

<あらまし>本研究の目的は、ワークショップ実践家が、ワークショップ実践を行う上での専門性についてどのような認識を持っているかを明らかにすることである。本研究では、面接調査及び質問紙調査を複合的に実施している。

<キーワード> ワークショップ、専門性、人材育成、意識調査

1. はじめに

近年、「新しい学びの手法」としてワークショップが注目されている(中野 2001)。現在では、ワークショップが行われる分野は美術、演劇、まちづくり、教育、ビジネス、国際協力、医療など多岐に渡る。20世紀末には新奇な言葉だったワークショップが、21世紀に入り日常に定着したという指摘もある(真壁 2008)。錦澤(2001)は表題に「ワークショップ」という言葉が含まれた研究論文数の国内における推移を調査し、1970年代をワークショップの萌芽期、1980年代を展開期、1990年代を普及期と位置づけている。

では、今後、ワークショップ実践家の育成支援を考えていく上で、どのようなアプローチがありうるのだろうか。他専門職に関しては、既にその職業に従事する人々を対象とした意識調査が多く行われており、その職業独特のものの考え方や必要とされるスキルなどを検証する研究が存在する(e.g. 前信・長吉 2003; 勅使河原・佐藤 2008)。これらのような専門性探索型の調査研究を行うことは、ワークショップ実践家を専門性ある者として育成するためにも有用な知見となると考えられる。

2. 目的

本研究の目的は、ワークショップ実践家の実践に対する意識を調べることでワークショップ実践家自身が考えている専門性とは何かを明らかにすることである。

3. 調査方法

専門性に関する調査研究を調べた上で、看護の専門性について面接調査を行い、その結果をもとに質問紙調査を行っている安田ら(2006)を参考に、調査方法を策定した。

調査概要

調査手順は下記の通りである。

- (1) ワークショップ実践家への第一次面接調査(実践経験5年以上の実践家10名を対象)。
- (2) ワークショップ実践家への質問紙調査((1)の協力者以外で実践経験5年以上の実践家70名を対象)。
- (3) ワークショップ実践家への第二次面接調査((2)における分析の結果を反映するかたちで、質問紙調査を受けていただいた実践家の中から10名程度を対象)。

実施状況

(1)ワークショップ第一次面接調査が終了し、それをもとに質問紙を作成した。現在は、(2)質問紙調査を行っている段階である。

4. 第一次面接調査の結果

第一次面接調査の対象者は表1の通りである。対象者の選定に関しては、実践歴、扱っているテーマ、所属等が偏らないよう配慮した。その結果、協力者が扱っているテーマや所属は多岐に渡っている。

第一次面接調査では、以下の内容に関して半構造化インタビューを行った。

(1) 基本属性

- ①現在の勤務先とこれまでの勤務先の変遷
- ②現在の職名とこれまでの変遷
- ③年齢
- ④ワークショップをする時のスタイル(コミュニティに属しその一員として実践する、一人で実践する、場合によって協働する相手を変えながら実

践する、等)

(2)ワークショップとのかかわり方に関する経験

- ①参加者としての経験
- ②スタッフとしての経験
- ③企画者として
- ④コーディネーターとして
- ⑤そのほか、ワークショップとのかかわり方の経験(例:取材, 観察, 見学, 本や映像など記録を見るといったもの等々)。

(3)専門職としての意識

- ①ワークショップ実践者に必要だと思うことと、そう考える理由。
- ②すぐれたワークショップ実践者の条件と、そう考える理由。
- ③ワークショップ実践家として後身を育てることを考えた場合身に付けておいてもらいたいもしくは知ってもらいたいことと、そう考える理由。その理由は何か。
- ④他の仕事や活動の中で、ワークショップ実践をすることと通じる部分があると感じられる職業とそう考える理由。

表1 第一次面接調査 協力者一覧
性別 年齢 主軸となる業務

協力者	性別	年齢	主軸となる業務
協力者1	男	63	チルドレンミュージアムの企画・立ち上げ
協力者2	男	46	コミュニケーション研究
協力者3	男	39	演劇の演出
協力者4	男	45	ユーザーの思考プロセスの解明と機械設計
協力者5	男	53	美術教育に関わる人材の育成
協力者6	男	54	学芸員
協力者7	男	39	教育普及担当学芸員
協力者8	女	27	子ども向けワークショップの実施と実践者育成
協力者9	男	34	デザイン教育
協力者10	女	31	企業の社会貢献部門にて子ども向けワークショップの実施

5. 質問紙調査の方法と今後の方針

第一次面接調査の結果から、ワークショップ実践家が専門性として重視している内容を33項目抽出することができた。これらをさらに<企画段階>、<当日の運営段階>、<実践家としての信念・価値観>という3カテゴリに整理した上で、専門性を測ることのできる可能性のある調査項目として26の設問を策定した。

これに加え、(1)基本属性、(2)日常の生活スタイル、(3)ワークショップへの関わり方(7種)それぞれに経験の度合い、(4)ワークショップ実践家育成への現状での関わり方、等について、第一次面接調査の結果や先行研究をもとに項目を作成した。

質問紙調査では、経験年数5年に満たない実践家にも協力を依頼することとした。これは、経験の程度や関わり方の軽重によってもワークショップ実践を行う上で何を重要視しているかという意識の違いがあることが予想されるためである。経験回数や関わり方のバリエーションについ

ても調査項目に入れることとし、今後、様々な角度から比較分析を行う予定である。

なお、本調査では筆者の既知のワークショップ実践家から、さらに知人を紹介してもらいながら協力者を捜していくスノーボールサンプリングという手法を採用している。この方法の採用理由は、ワークショップ実践とその実践家という本研究対象の特性に依拠している。ワークショップ多領域にまたがって実践が行われているため、全ての実践家が登録されている台帳が存在していないのが現状である。そのため、厳密なサンプリング調査は難しい。そこでなるべく偏りが生まれないよう、多くの方から紹介を受けそのコネクションから調査ルートを確保するよう努めている。

参考文献

- 前信由美・長吉孝子(2003) 看護師の専門職意識の把握:アンケート用紙を作成して. 看護学統合研究, 5(1): 9-16
- 真壁宏幹(2008) 古典的近代の組み替えとしてのワークショップ:あるいは「教育の零度」. 慶應義塾大学アート・センター, Booklet 16, 112-128
- 森玲奈(2008) 学習を目的としたワークショップのデザイン過程に関する研究. 日本教育工学会論文誌, 31(4): 445-455
- 森玲奈(2009) ワorkshop実践家のデザインにおける熟達過程: デザインの方法における変容の契機に着目して. 日本教育工学会論文誌, 33(1): 51-62
- 中野民夫(2001) ワorkshop: 新しい学びと創造の場. 岩波書店
- 錦澤滋雄(2001) 歴史的変遷からみた「ワークショップ」の概念(1974-1998). 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2001, 197-198
- 高尾美沙子, 荻宿俊文(2008) ワorkshopスタッフの実践共同体における十全性の獲得のプロセスについて. 日本教育工学会論文誌, 32(Suppl.): 133-136
- 勅使河原隆行・佐藤弥生(2008) 在宅ケアサービスにおける介護福祉士の専門性の研究. 保健福祉学研究, 6: 83-98
- 安田真美・山村江美子・小林朋美・寺嶋洋恵・矢部弘子・板倉勲子(2006) 看護・介護の専門性と協働に関する研究 第2報: 介護保険施設に従事する看護師への質問紙調査を通して看護の専門性について考える. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 14: 117-126